



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

恩おんを送おくる

古こ来らいより日に本ほん人じんは「孝こう行こう」をとても重おもんじてきました。
日蓮聖人の御遺文『開目抄』にも次の一節があります。

「孝こうと申もうすは高たかなり、天高てんたかけれども孝こうより高たかからず。又また孝こうとは厚あつなり、地厚ちあつけれども孝こうよりは厚あつからず。聖賢せいけんの二類るいは孝こうの家いえより出いでたり」

戦前せんぜんの『修身しゅうしん』の教科書には「孝こうは百行もひゃくこうの基もと」とか「一孝こう立ちて万善まんぜんこれに従したがう」というような教えがありました。
『修身しゅうしん』の三年生の教科書には稀代きだいの農政家のうせいにか、二宮金次郎にのみやきんじろう（尊徳そんとく）の孝行話こうこうばなしが載のっています。

「二宮金次郎は家が大層貧乏であつたので、小さい頃から父母の手助けをしました。金次郎が十四歳の時、父が亡くなりしました。母は暮らしに困って、末の子を親類へ預けましたが、その子のことを心配して毎晩よく眠れませんでした。金次郎は母の心を思いやって、『私が一生懸命に働き



ますから、弟を連れ戻してください』と言いました。母は喜んでその晩すぐに親類の家へ行って、預けた子連れを帰り、親子一緒に集まって喜び合いました。孝は徳のはじめなり」

日本人に大きな影響を与えた儒教の經典に『孝経』があります。聖徳太子の頃に渡来し、その後、奈良の孝謙天皇は天下に詔され、家毎に『孝経』を一卷蔵せしめられたということです。降って平安時代には皇太子の読書始めに『孝経』が用いられたそうです。

『孝経』は孔子が弟子の曾子に説いたものだといわれています。冒頭には次のように書かれています。

「およそこの孝というものは、あらゆる徳と称せられるものの根本義をなすものであって、前に述べた至徳というものも、畢竟は孝に外ならぬものである。故にこの至徳の根本が確立して後に始めて人の履み行う道も生じて来て、従ってすべての教化というものも、是から起こって来るので



ある。即ち至徳しとくといい、要道ようどうというも、皆みなこの孝こうということ以外いがいにはないのである」

孔子こうしによれば、「親孝行おやこうこうは徳とくの行おこないの根本こんぽん的なものだ」というのです。また「孝行こうこうが必ずしも高尚深遠こうしょうしんえんなものだと思おもう必要ひつようはない。たとえば、飲食いんじきの不摂生ふせつせいをせず、病氣びやうきにならないように自分の体からだを大切にすれば、それが親孝行おやこうこうになる」といいます。孝道こうどうの第一歩だいいは親おやからもらった体からだを大切たいせつにすることなのです。そして「卑近ひきんな第一歩だいいから踏み出ふみだし、その後あとに社会しゃかいに出て人格じんかくを陶冶とうやし、人の範はんとなり、自分の名なとともに親おやの名なを高めることが孝道こうどうの成就じゆうじゆである」と書かかれています。

『孝経こうきやう』の最後さいごには親おやの死しにつかえる道みちが示しめされています。「野辺のへへの葬送そうそうに当あたっては、声こゑを張り上げて泣なき、心の限かぎり精せいの限かぎりに哀かなしみを尽くすように」と書いてあります。さらに「墓はかを建たてるにあたっては良い場所ばしよを選び、神仏しんぶつを祀まつるように供養くようせよ。そして、四季折々しきおりおり、命日めいにちその他の



時々墓に足を運び祭事を行い、みんなで故人を偲び合うように」とあります。故人を語ることはご供養になるのです。

法事の時に「人間は二度死ぬ」という話をよく聞きます。一度目は肉体の死、二度目は忘れ去られてしまうこと。それゆえ、「法事の際には故人のことを偲んで語り合いますよ」というのです。これが孝行であり、ご供養になるのです。

法音寺の始祖・杉山辰子先生も御法話集の中で孝行について次のように述べられています。

「親孝行には上・中・下がある。下は衣食を施す。中は親の心に従う。上の親孝行は、親が生きている時には法華經の話を親にして一緒に功德を積み、親が亡くなってからは法華經を人に弘め、実行し、その功德を回向する。これが上の親孝行である」

杉山先生は「よく世間では『孝行したい時に親はなし』



というけれども、そんなことはない。親が亡くなってからでも法華経を广泛宣传し、実行すればそれは充分な親孝行である」と言われています。

この孝行の話を御開山上人は、若い頃に聞いて、親孝行しなければと強く思い、上の親孝行を目指されたのです。ところが、御開山上人のお父さんは非常に頑固な人で、「自分はお前より法華経のことはよく知っている」と言われたそうです。

父・徳太郎さんは、鈴木家の元々の菩提寺であった禪宗のお寺のご住職さんから、「一番尊いお経は法華経だ」と聞いたことから自分で経本を買って求めてお経を読むようになり、自ら書き下し文を書いて父親に読んで聞かせることもありました。また、日蓮聖人の御遺文の勉強もしていたそうです。そして、子守歌代わりに子ども達にお経や御遺文を読むほどだったそうです。

それゆえ、御開山上人が杉山先生から聞いた「法華経の実行は慈悲・至誠・堪忍ですよ」という話をしても、「法



華経けきやうのことはお前まえよりよく知しっている」と相手あいてにされなかつたのです。

徳太郎とくたろうさんは、鈴木家すずきけの法事ほうじの際さいに僧侶そうりよの読経どきやうの間違まちがいを自信じしん満々まんまんに指摘してきしたこともあったそうです。

御開山ごかいさん上人しやうにんは、どうしたら父親ちちおやに杉山先生すぎやませんせいのお話はなしを聞きいてもらえるかと杉山先生すぎやませんせいに相談そうだんされました。すると杉山先生すぎやませんせいは言いわれました。

「まず、お父さまの心こころに従したがうことです」

確かに相手あいてが心こころを開ひらかなければ、何なにをどのように話はなしても聞きいてはもらえません。そこで、御開山ごかいさん上人しやうにんは「中の親ちゅうのおや孝行こうこう」を実践じっせんされたのです。一年ねん、二年ねんとお父さまの言いうことを「ハイ」と二つ返事へんじで聞きかれたのです。

徳太郎とくたろうさんは非常ひじょうに厳格げんかくな人ひとでしたので、最初さいしよのうちはとても難儀がんぎをされたようですが、御開山ごかいさん上人しやうにんは堪忍かんにん強く続つづけられたのです。するとある日ひ、徳太郎とくたろうさんが言いわれたそうです。

「お前は日本中にほんじゅうで私わたしの意見いけんを一番ばんよく聞きいてくれる者ものだ。



私は良い息子を持った。そしてお前は良い先生から教えを受けた。私は常に法華經を読み、諳んじ、訓読して、父親に読んで聞かせたものだ。お經を読むことはお前に負けないと思っていたが、法華經が毎日の暮らしに日々応用できる教えであることを知らなかった。本当にありがたいことだ。これからも聞かせてくれ」

徳太郎さんはこのように言って御開山上人の話を楽しみにしておられたそうです。

やはり上・中・下とある親孝行は、いきなり上からではなく、下から順番に進めていかなければいけないようです。御開山上人はその後、杉山先生の弟子となり、繁昌していた商売をたたみ、家を出ることになります。それに対してお父さんは「お前の好きなようにして良い」と全く反対されなかったそうです。長男が家を守るということが一大事だった時代の話です。

関支院の吉橋宗敬上人からうかがった話です。



御開山上人が僧正になられた時のことです。僧正になると、紫の衣に金の紋がついた緋色の袈裟をかけるのですが、ある日、御開山上人が「新しくつくった紫の衣と緋の袈裟を用意するように」と言われました。その衣は、仕付け糸はとってありましたが、御開山上人はまだ袖を通されてはいませんでした。

吉橋上人は、それを持ってどちらに行かれるのだろう。どなたか立派な方の法事でもあるのだろうかと思われたそうです。そしてお供をして、着いた先は寄木のご生家だったのです。その時、徳太郎さんは病の床に伏しておられました。御開山上人は枕辺で「お父さんのお陰で法華經にご縁ができ、杉山先生に出会い、僧侶となることができました。そして僧正に昇叙されました。ありがとうございます。今日は僧正の衣を持ってきました。まずお父さんに着てもらいたかったです」と言われました。

御開山上人が、徳太郎さんの背中を起こし、衣と袈裟を掛け、「お父さんは私よりもずっと立派な大僧正です」と



言われると、徳太郎さんは「ありがとう」と涙を流されたそうです。徳太郎さんはその後、「生家の土地も建物もすべて布教に使うように」という遺言を残されました。御開山上人は当時、昭徳会や日本福祉大学でお金が必要で、なかなか布教所を作ることができませんでした。先代日達上人の時代になって今の開基堂ができたのです。

「知恩報恩」は仏道修行の根本です。その中でも親孝行は一番の「知恩報恩」ですが、親に恩を返すのはなかなかむずかしいことです。充分に親に恩を返したという人は中々いないと思います。

「恩送り」という言葉があります。

江戸時代の文獻にも出ているそうです。誰かに恩を受けたら、別の人にそれを送る。そして、その送られた人がさらに別の人に渡す。そうして恩が世の中をぐるぐる回っていくことを指しています。



親^{おや}から受^うけた恩^{おん}を、子^こや孫^{まご}や縁^{えん}のある人^{ひと}達^{たち}に送^{おく}っていく
というの^{おも}もすばらしいことだと思^{おも}います。

仏^{ぶつ}教^{きやう}学^{がく}者^{しや}のひろさちやさんが若^{わか}い頃^{ころ}、インドに一人^{ひとり}旅^{たび}を
して^さいる最^{さい}中^{ちゆう}、道^{みち}に迷^{まよ}われたことがあ^あつたそう^{そう}です。そこ
で道^{みち}端^{はた}でたむろして^{たす}いるインド人^{じん}の一人^{ひとり}に地^ち図^ずを渡^{わた}して道^{みち}
を尋^{たず}ねました。

するとそのインド人^{じん}は、「そこへ行^いくのはむずかしいぞ。
しかしお前^{まえ}は運^{うん}がいい。俺^{おれ}が案^{あん}内^{ない}してやる」と片^{かた}道^{みち}40分^{ぶん}以^い
上^{じやう}かかる道^{どう}中^{ちゆう}を同^{どう}行^{かう}して案^{あん}内^{ない}してくれ^くれました。目^も的^{てき}地^ちに到^{とう}
着^{ちやく}して、お礼^{れい}にお金^{かね}を差^さし出^だしたところ、そのインド人^{じん}は
「いら^いない」と言^いってそのお金^{かね}を受^うけ取^とりませ^せん。

しかしその後^ご、インド人^{じん}は「俺^{おれ}はお前^{まえ}に親^{しん}切^{せつ}にしたな」
と言^いいました。

お金^{かね}が足^たりないの^{おも}だろうかと思^{おも}って、お金^{かね}を足^たして渡^{わた}
そうとしたら、また受^うけ取^とりませ^せん。

そのやりとりを数^{すう}回^{かい}繰^くり返^{かえ}した後^{あと}にそのインド人^{じん}が言^い



ました。

「お金がほしいのではない。お前は俺の質問に答えろ。俺はお前に親切にしたな」

「ええ、あなたは確かに私に親切にしてくれた。だから私はお礼をしようとしている」

「お金はいらない。俺はお前に親切にした。この先お前は誰かに親切にしてやってくれ。それが俺に対する礼だ」
これぞ「恩送り」ですね。

今から20年程前に『ペイ・フォワード』（恩送り）というアメリカ映画がありました。

学校で先生が生徒達に言うのです。

「もし自分の手で世界を変えたいと思ったら、君達は何をしますか」

主人公のトレバーは恵まれない少年でした。お母さんがアルコール依存症で、お父さんは暴力をふるう人でした。トレバーはシモネット先生に「世界を変えるなら、自分が



受けた恩を、全然関係のない三人の人に返そうと思う。そして、その三人が同じようにしたら世界は変わらと思う」と答えます。そして、トレバーは早速、ホームレスのジュリー、シモネット先生、クラスのいじめられっ子の三人にペイ・フォワードを実行することになりました。最初は挫折もありますが、ペイ・フォワードの輪がどんどん広がっていきます。

結末には涙される方も多いと思いますが、一度は見えておいてよい映画だと思っています。

最後に昨年私が出会った方の話です。東京支院に行ったときに、80歳過ぎの女性が正看護師の免状を持ってこられました。

「見てください。正看護師の免状です。本当は御前さま（御開山上人）に一番見ていただきたかったけど、いらっしやらないので、山首上人に代わりに見ていただきたいのです」



経緯（けいゐ）を聞くと、その方は児童養護施設・駒方寮（こまがたりようしやうしん）の出身で、御開山（ごかいさん）上人（じやうじん）を父（ちち）と慕（した）って育（そだ）った方（かた）でした。

当時（とうじ）、横浜（よこはま）で家政婦紹介所（かせいふしやうかいじよ）をしておられた重政（しげまさ）さんという篤信（とくしん）の女性（じよせい）がいました。御開山（ごかいさん）上人（じやうじん）の紹介（しやうかい）で、その方はその家政婦紹介所（かせいふしやうかいじよ）で働くようになったのです。重政（しげまさ）さんは御開山（ごかいさん）上人（じやうじん）からの紹介（しやうかい）ということで、特に目（め）をかけてその方（かた）の面倒（めんどう）を見（み）られたのです。その後（ご）、重政（しげまさ）さんの援助（えんじよ）により、准看護師（じゆんかんし）になることができました。また重政（しげまさ）さんの紹介（しやうかい）で結婚（けっこん）もされました。その後（ご）、50歳（さいだい）台（だい）で法政（ほうせい）大学（だいがく）文学部（ぶんがくぶ）史学科（しがく）を卒業（そつぎやう）されました。さらに70歳（さいだい）台（だい）である大学（だいがく）の看護学部（かんごぶ）を卒業（そつぎやう）されました。そして遂（つい）に正看護師（せいかんし）の試験（しけん）を受けて合格（ごうかく）されたのです。

「今（いま）から正看護師（せいかんし）になって何を（なに）されるのですか？」と私（わたくし）はその方（かた）にお聞（き）きました。

するとその方（かた）は言（い）いました。

「御前（ごぜん）さまや重政（しげまさ）さんにたくさんの恩（おん）を受け（う）けたけれど、恩（おん）を返（かえ）せていないのです。今（いま）からでも遅（おそ）くはないと思（おも）い、そ



の恩おんを少しすこでも返かえすために、正看護師せいかんごしになって世よの中なかの人ひとに尽つくしたいと思おもったのです。今いま、コロナで世よの中なかが大変たいへんです。ワクチンの接種会場せつしゅかいじょうは人手不足ひとでぶそくですから、まずはそこでお手伝いてつだいをしようと思おもいます」

その方かたは接種会場せつしゅかいじょうでワクチンの希釈きしゃくを担当たんとうされたそうです。
その後ご、しばらくしてから、私わたしがまた東京支院とうきょうしえんに行いったところ、その方かたが封筒ふうとうを持参じさんしてこられました。封筒の中ふうとうのなかには、ワクチン接種の仕事しごとで得た報酬えほうしゆの全額ぜんがくが入はいっていました。

「私わたしのような子ども達たちのために使つかってください」
私は感動わんどうしました。そして、ああ、こういう恩おんを送る人おくひとにならなければと思おもいました。



良い教えの話を聞きましょう。

全国の法音寺各支院・布教所では
毎月の講日の中で

三徳の教えを聞くことができます。

是非講日にご参詣いただき

教えを心にしみ込ませましょう。

◆今月の山首上人さまご親修日程

西春支院	8月2日(火)	一宮支院	8月5日(金)
上野支院	8月10日(水)	静岡支院	8月12日(金)
岡山支院	8月14日(日)		